

ソードアートオンライン オリシュゼーション・リコリス

愁雨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本作はオリジナル設定の元にアリシゼーション・リコリスルートを主軸にしたアンダーワールドの物語を進行していつたりするお話だつたりそれ以外の舞台で展開した物語だつたりシナリオ枠ごとに主人公が異なります。

1：スーサイド工ちゃん

チートオリ主の傍付きになつた口二工が異なる経緯を辿つたアンダーワールド大戦を皮切りにして様々戦場で戦うお話。 四帝國大乱編とか狂える神獣編とか電腦異界出張編だとかそう言うの。無地の真綿に泥を染み込ませたら一瞬で染まつた系。

登場人物：口二工ちゃん リーナ先輩 メディナ先輩 他多数

2：ユージオくんはバランサー

キリトとユートというタイプの異なるバカ二人の友人をこなす彼を主人公にした 勧善懲惡ロジックの時代劇のような何か。御老公（カーディナル）の元、ティーゼとセルカの二人と共に人界に燐る悪意を切り捨てていくお話。

登場人物：ユージオくん 幼女賢者<sup>カーディナル</sup> ティーゼちゃん セルカちゃん 他多数

3：GGOFB：SnowTheGUNSlinger

死銃事件が始まる前のお話。フェイタルバレット本編のようなそうでないお話。

オリジナル主人公 雪城 星里奈がアバター SnowSta

r（スノウスター）となりスタイルッシュガンアクションするお話。

登場人物：スノウスター（オリ主）及びフェイタルバレットに登場する人々

#### 4：アリスちゃんは人界特別大使

リアルワールドに渡ったアリスの不思議な冒険。

様々なVRMMORPGを渡つて、電腦世界の広さ、そこに生きるNPC達を識つて世界の広さを知つていくお話。

#### 登場人物：アリスちゃん リアルワールド現住の人々

タイトルと内容の筋だけは思い浮かんでる上記四つのお品書きとなります。

色々深く考えず読んでください。

作者の活動報告かメッセージに切り取つてもらいたい場面などがあればリクエストを受け取るかも知れない程度のテンション。

## 目 次

【予告編】スープーロニエちゃん・傍付きになつたらその人がウルトラ トンチキチートでした【ダイジエスト】	1
スープーロニエちゃん 人物設定	14
ミッショソ1 まじゆうとうばつ なかまをそろえよう!	17
ミッショソ1 まじゆうとうばつ なかまをそろえよう! 1—2	14
みつしょんえくとら ユート初等鍊士のウルトラトンチキチート 列伝 きこりのわざ	22
みつしょんえくとら ユート初等鍊士のウルトラトンチキチート 列伝 えんはんすあーまめんと・たいじゅつのすべしやりすと	26

【予告編】スーパー口ニエちゃん・傍付きになつたらそ  
の人がウルトラトンチキチートでした【ダイジエス  
ト】

（後にアンダーワールド大戦と呼ばれる事になつた最終負荷実験）

「ティーゼ。後はお願いね？」

「口二エ！ いくらユート先輩が申しつけたからって……！」

外には多数の外界人と思しきものたちが群れなして押し寄せてい  
る。

肝心要の最強戦力は整合騎士アリスを外の世界に誘うためにここには不在。

騎士長も、副騎士長も割り振られた戦場に。東の大門から攻め寄せる闇の軍勢本隊のみならず、東西南北に別れた四方の要害、その全てからの侵攻。

東の大門からの侵攻という予測は大きく崩された。

A · L · I · C · E

その劣勢状態を再臨した最高司祭と司祭代行の両名の元に人界軍は反攻作戦に出た。

創世主達が望む辿り着いた者と呼ばれる存在、整合騎士アリス  
薔薇の剣士ユージオ。

そのどちらかの外界への到達とそれを阻むために送り込まれてきた創世主達の敵対勢力との闘い。

最終負荷実験と称された闇の軍勢と人界軍との大規模な戦争

各人の気質ともしもの場合の予備まで含めて考えられた結果。

最強戦力を自らも戦いうる準最強格の整合騎士アリスの直衛に当て外界に。

青薔薇の剣士ユージオを最悪のケースに備えた予備として残し、また、本人の希望から北帝国の要害、北の洞穴からの侵攻に対する戦力として残す事となつた。

再臨した最高司祭<sup>アドミニストレータ</sup>のその力量と祈願により 創世神話の三女神の來訪。

司祭代行<sup>カーディナル</sup>の招聘により 黃昏の魔女 と呼ばれる存在とその強大なる使い魔 災厄の鎧 が外界より呼び込まれる。

足りぬモノはあるところから引き込むと言わんばかりの手法はしかし。

「……闇の軍勢も同じ手を使う事が出来る。そう言つてはいたしね。その為に、先輩は私をここに残したわけだし」

そう言うとロニエは その装具を修剣学院女子制服から師より譲られた白い外套とその合わせの具足たる異界に於いて逃えられた【レギオンストームジャケット・レギオンストームブーツ】に。

立て掛けられた 師直伝のチートによつて使用を許された黒き直刀剣【夜空】。普段であればその重さに耐えられないはずのそれを【使用権限拡張処理】という源流は最高司祭様の秘術を施され使用権限を自らに移した神器を腰に吊るす。

只一度のみ 【武装連結連奏：記憶解放術：次元斬・界境崩落】<sup>ウェポンオーバーライド・リリース・リコレクション・ディメンジョンスラッシュ・ワールドエンディング</sup> と言う師がもつとも得意とする神器相当と目された闇魔刀の極技を再現する事が許されたチートも甚だしい魔改造神器である。

手甲、脚甲も自らの体躯にあわせて 装飾品店の主人と師と三人で幾日もかけて調整した近接格闘技に特化し、尚、武具の扱いに影響を及ぼさぬようにした逸品。

そう。

最終局面、敵方の詰みの一手を突き崩す。

その為に 彼女は選ばれた。

リアルワールド、外界より呼び込まれた者を次元の壁を切り裂いて仮想現実から現実<sup>A</sup><sub>R</sub>拡張に送り返すという脳の処理すらも上書きするもはや意味不明の不可解極まりない一斬を再現するために。

よりもよつてその扱い手がこの少女であるなどとは、現実世界から来る者、誰にも秘したまま。

「それより溯つて学院生活へ

「ああ、確かに偉いのだろうな。お前の家は」

少年は吐き捨てるように。

この世界で知り合い、ここまで共に歩んできた友と言つてもいい男を侮蔑した二人の貴族を明らかに 敵 と認識した。

その目は かつて そう。ここではない遙か遠くの。今ではない時を溯つた先の。

天空城アインクラッドに於いて 絶殺を誓つたとある男に向けた視線と同質。

「ライオス・アンティノス と ウンベール・ジーゼック だつたか？ 僕はな。おまえ達の【家格】には敬意を表するが、おまえ達個人に表するモノはない」

そうでなければ、身分の差を持ち出してしまえば、指導する者と指導される者で逆転現象が起きうるだろう？

語るのならば剣で語るが良い。

少年は

「……貴様……帝国基本法を軽んじると言つたのか……？」

「耳が悪いな。僕は『個人』を指しているぞ。天職によつて家を継ぐ事が決まつているのならば、こんな所にいる価値も意味もない。さつさと貴族のお役目を果たしに家に帰れば良い。そのまま、主席となり栄誉在る騎士になりたいのなら、死ぬ覚悟の一つくらいはあるんだろう？」

冷えた言葉は世界の条理に真っ向から反する。

そう、本来であれば禁忌目録に反するこれらの言動はしかし。

不可思議なる不可解なる現象を持つて 【元老院】 の監視を逃れる。彼等、ライオスとウンベルは気が付かない。

余りに隔絶した力の差が 異常を異常と感知させず 世の理 をねじ曲げているなどと。

そう。『少年が既にして人界の守護者たる最高司祭と同質の存在によつて祝福とその庇護を受けている』など理外にもほどがある。

そもそも、無登録民である少年は 原則的に 禁忌目録の逸脱を監視される対象ではない。

翻つて絶対の法にそもそも従う立場にない少年にとり、その他の如

何なる法も従う縁はないのである。

生粹の無法者が其処にいた。

視線を切り、その手に引つ提げた練習用の木剣で　これまた練習用の打ち込み用の木人形を。

鞘はない。されど、鞘があるかのように納刀の形に構え。

振り抜く横一閃。

それはアインクラッドに於いて　刀スキルに属するソードスキル『絶空』。

型も何もないそれは只弾かれて終わる。そう信じて嘲笑つてやろうとした彼等の目の前でそれは。

真横一文字にずれて木人形が切断される。

「同じ道具で同じ事が再現できないのなら、土台にすらたてない。……試合の場で無惨な屍にならなければ良いがな。試合の中、一撃であれば。修剣士の至る騎士の目指す剣戟の極致。一撃必殺が為されたのであれば天命全欠損もやむを得ない　と特例を持つて許された事項だ。貴族裁決権が処刑を許すようにな」

それは彼等すら及びもつかぬ処刑宣告。

次の公式の試合の場で出合えば　切り捨てる。

それが嫌なら　うまく調整して下に落ちろと。

真の殺意、殺の心意に充てられ　凍り付いたように動けなくなるライネスとウンベール。

彼等の心に貴族の自負が甦った頃には既に彼はその場から消えていた。

（北セントリア修剣学院のとある上級修剣士の部屋）

「……ロニエ・アラベル　か」

「は、ハイ！　ユート主席上級修剣士の傍付として一年間、お側に控えさせていただきます！」

「じゃあ、最初の命令というか、お願ひだけど

「ハイ！」

「……その口調、やめない？　もう少し碎けて良いよ。礼法合切は君

の方が理解しているだろうから時と場合と人を選ぶ目はあると思うし。その上で、僕にはもう少し碎けて良い」

そんな事を言いながら、窓を眺めていた視線を切り、少年は少女を見据える。

修剣学院の制服に身を包む少年の目は、それまでの彼とは違った意志の強さに装わされている。

碎けても良いと言われて彼女は困惑する。

何しろ、そう言う意識は欠片もないのだから。

その礼法 자체が、自分の傍付きにこそ礼儀正しく接すべしとするのだから仕方ない。

「まあ、アレだね。こうしよう。僕は無位無冠の流浪の稀人だ。仮にも貴族の家系である君と比べた場合、家格の差がある。故に、貴族として気を使わねばならない部分を守れば良い」

「……流浪の稀人……？」

「そう。僕はやがてはここを去る……その前に……」

空間が歪む。まるでそこが切り離された異空間のように。

其処にいてはいけない誰かの気配を才覚在る口二工は感じ取る。揺らぐように三人。

見えざる人たちの庇護を受けているかのよう。

後の口二工は知る事になる。このときに感じた気配こそが。

彼を電腦の世界において庇護する【転生司祭。司祭代行、黄昏の魔女】と呼ばれる三聖人であつた。

「僕は君の手を採つた。選択権は此方にあり、最後に残されるであろう家の格の差で弾かれていく君たち二人を選ぼうとユージオと相談して予め決めていたからね」

口二工は幻視する。

見えてはならないモノ、あるいは、稀人という言葉が正しいのならば、この歪みの先にある者こそが、彼の帰るべき場所に繋がっているのか。

「その手を採つた以上、僕には君を傍付きとして指導する義務がある……とは言え、僕が教えてあげられるのは、お上品な騎士としての戦

い方ではなく、その先をつかみ取るための 戦士、闘士としての戦い方だ」

心意 と呼ばれる強大な力があると。

口二工はお伽噺の中でそれを知った。

世の理すら、意志の力でねじ曲げてしまえる者。

虚空に手をかざし 武器を引き抜く。

それだけであるのに、それを行える事の異常を口二工は理解する。目の前の人にはきっと、人の姿をしている神と同じかそれ以上の存在なのだと。

一振りの剣を 口二工の前に。

「……本来、その剣は僕の代わりにここに立つはずだつた男の手に委ねられる剣。銘を 夜空」

【夜空】の銘に恥じぬほどに黒く重い。

悪魔の樹と呼ばれたギガスシダーレを削り剣の形に整え直した一振り。

「君にこれから先を生き抜くための力を与えてあげる事は出来る。でも、力を振るう意味と理由は自分に生じたモノ、自己の裡に見つけるんだ」

その剣を指で招き寄せると握り取り、無造作に構える。

それが構えであると理解できたのは僥倖だった。

「秘伝剣技として各流派に語り継がれている【秘奥義】。それらが形となる前の源流、アインクラッド流の剣技」と ここより遠く。選ばれた者しかこの世界より渡る事が出来ぬ異界、リアルワールドの戦闘術理論」

その言葉は異様、異質に響いて、尚、少女の裡に刻まれる。

そう。目の前的人は、並み居る貴族の嫡子。その選ばれた者達を押しのけて主席に立つ剣士。

無位無冠、爵位すらもたず、どこより来たのかすら定かではない。

されど、誰よりも深く 神聖術 法学 史学 にすら精通した才人。

どこよりその知識を仕入れていいのかすら定かではない領域で、各

教師陣と丁々発止とやりとりすらしているのだ。

それがいわゆる 不正行為の賜であるなど誰が知ろうか。

「口二工。君に僕の持てる手管を徹底的に仕込む。僕の域になれば、くだらない貴族の手が及ぶ事はないけど、5等貴族、6等貴族である君やティーゼは次席まで引き上げたユージオを蹴落とそうとする者や僕自身をやつかむが手が出せぬ者達の手によつて貴族裁決権を使つて貶めるには最適の的だ」

爛々とした目に口二工は捕らわれていく。

それが正しい事が否かは横に置いて、彼女の命運はこのとき、明らかに変転した。してしまつた。

「傍付き鍊士たる君に 僕という異物の後を追えとまでは言わない。その手で大切な者を守れるように。護るべき者を守り抜く力を手にするために。命の価値をその手に掲むために」

くるつと向きを変えた【夜空】の柄を差し出すようにして。

「その手に剣を帯びる覚悟があるのなら、これを握るんだ。重くとも、辛くとも、誰かのための刃になると。友を守るための力になると」

（時は戻つて 最終負荷実験終盤（2日目））

「あの時。差し出されたこの子の柄を握つたときに決めたの」

腰に佩いた【夜空】の柄を撫でるように。

「私は、この人の傍付きで居ようと。例え、その道が辛くても、師の示す道を。剣術以外のあらゆるを受け継ごうと。その上で 守ると決めたの。大切な友達を」

口二工は回想する。

あの時、一手遅れたせいで不覚をとつた。

貴族懲罰権を持つて、女性の尊厳を傷つける邪淫。

彼等はそれを主席と次席にまで駆け上がつた無位無冠の少年達を蹴落とすために。

傍付きすら守れぬ無能者に貶めるために。

目の痛みさえなければ、抉られそうな痛みを堪えたせいでティーゼ

が人質に取られ。

遅れてきたユージオとともに 貴族懲罰権を盾にしてティーゼを

躊躇うとする二人の悪漢の前に身動きが出来なくなり。

先に自由を取り戻し、青薔薇の剣でウンベルールの腕を切り飛ばし、されど弾けた目の齧す激痛で動けなくなつたユージオ。

ティーゼの身を案じ傍による事を優先した自分を横目にして。

遅れてきたユートは状況を確認し、即座にライオスの背後をとり、一切の抵抗の余地なく首を折つた。

自分がなんのために、ユートから「もしもの時に正しさを貫ける力を学んだのかすら解らなくなつた瞬間だつた。

師である彼はそれを咎めず、『その条件ならティーゼの身を守るのが最適解だ。手札を斬らずに終わらせた事。それが次に繋がる』

そうとだけ言葉を残した。『次』。

そう。次が来たのだ。

もし、あの時、自分が対処しきつてしまえば、その先を無事にやり過ごせたのかは解らない。

あの条件下で、ユージオが ALICE に至らなければ。

ユートが 明確に禁忌目録を破り、ユージオと共に行く事を選択しなければ。

「ティーゼはここに居て。負傷者がたぶん、一気に増えてる。救護、救援も大事な仕事だから……それじゃあ、伏せ札としての仕事をしてくるね」

そうしたそれぞれの選択が。

今、このときに繋がつてる。

師と仰いだ ユート主席上級修剣士のその薰陶を胸に。

敵の思惑の一番骨子を破壊する。

人界軍 駐屯地 防衛ラインにて

「あなたが再起できてるとは思わなかつた」

肩口を抑えアスナは息を荒く吐く。

P o H と呼んだ男。 S A O に置ける茅場晶彦と同等か、あるいはそれ以上の悪意の持ち主。

この男の危険度を理解していたからこそ、発見次第最大攻撃を見舞つたというのに。

マザーズロザリオ。ユウキの作り上げたそれは確かにあの男の胸元に風穴を開けた。

だが、それではなかつた。

この男をこの世界より退場させるつもりがあつたのならば。

頭蓋を断ち割る唐竹 か 首と胴体を切り離すネックカットの必要があつた。

頭が残つて思考できる限り、この男のソレは止まらないのだと。自身が不利に追い込まれて漸くアスナは理解した。

スーパーアカウント【創世神ステイシア】の力を。その権能を駆使しても尚。

「あの女はどこだ……？」

メイトチョッパーが戦場の死を吸い上げ、P.O.Hに強大なりソースとして力を与えていく。

「あの最高司祭だとか言うクソ女はこの世界に居やがるんだろう……？」

憎悪に塗れた声は只ひとりの女に焦がれる。

復讐、報復に彩られた感情はしかし。

「……最高司祭様ならば、ここにはおられませんよ。そもそも最高指揮官が前線に出なければならぬ軍隊は破綻します。あなたたちの指揮官、暗黒神ベクタが此方の最強戦力に潰されるようにな」

白いコートを羽織った少女 が そうなる事を確信した声で未来を決定づける。

誰しもが目を見張る。

S A O からその姿に慣れ親しんだ者も居る。

違うゲームですら、彼はそれを装っていた。G G O ですらそれをモチーフにした白の防弾コートを誂えていたのだ。

その彼を代表するかのような【レギオンストームジャケット・レギオンストームブーツ】を我が物かのように着込んだ少女。

「……ロニエさん？ アレ、その恰好……え？」

アスナをして驚愕する。

彼があの装備をこの子に与えた。

その意味するところは。

クラインもエギルもシリカもそれを見て驚く。  
つまりはそれの意味する事は。

「ロニエ・アラベル。ユート主席上級剣士傍付き鍊士。名も知らぬ外界の外道。あなたを終わらせる者です」

【夜空】を鞄内に腰だめに構え彼女はP.O.Hの前に立つ。

抜刀の構えからの抜打ちの刀ソードスキル 絶空。

黒い【夜空】の元となつたギガスシダーラの持つリソース吸収能力と重なり合つたその一斬は。

P.O.Hに付き従うかのようだつた赤鎧の暗黒騎士達は痛みを感じる間も無く退場させる。

P.O.Hが言葉を放つその前に被せるようにロニエは言葉をつなぐ。  
そう。彼と戦うときに必須なのは会話をしない事、させない事。  
煽動PKたる彼はその言葉で人を玩弄し操る。

「私にあなたを怖れる理由はありません。同じ世界より来られた方々は、あなたのしてきた悪意を知っているようですけど」

アンダーワールドはリアルワールドより死が近い世界である。  
人の死はいつでもどこでも近くにあった。

それ故、怖れないのではなく。

恐怖の感情を持つてこの者と接するという事は、

負の心意が相手に力を与えてしまう。

相手が強いと知る者がP.O.Hに強さを与える、恐怖が力を与える。  
誰かしらがどこかで感じるそうしたイメージが無意識のうちのP.O.Hの力へと変わっていく。

故に。この魔人を切り伏せるのは、

P.O.Hという者に何の因縁もない者が一番望ましい。

そう、執着する者の手で終わるなどという幸福を与えてはならず、  
また、無意味に無価値に終わらせなければならぬ。  
路傍の石の如く。

事実、ロニエの為した最初の一斬から彼は正気を取り戻せていない。

い。

そう。『いきなり現われた小娘に乱入されて、俺の目的が叶わなくなる』という意識に囚われたのである。

そして、それまで戦っていたS A OからA L OにG G Oへと戦い抜いてきた歴戦の猛者達の共通意識『P o Hという最低最悪の殺人鬼』という思い込みによつて強化されていたP o Hを。

全く知らぬと吐き捨てる事で凶悪無比なイメージの鎧を剥ぎ取る。そのイメージを剥ぎ取った瞬間、彼の全身を悍ましい寒気が襲う。けして癒えたとは言えぬ彼に刻まれた電腦世界でのキズ。

自分の全く見知らぬ女と敵対するという事は彼にとり絶大なる負荷が起きている。

戦士として鍛えられた精神性がそれを取り繕い、即座にこの女を斬り殺さんとメイトチヨツパーを。

【夜空】と【友切り】が鎧攻りの如くにぶつかる。

それが敗因になつた。

ギガスシダーの持つリソース吸収能力をその刀身に秘める【夜空】。口ニエは己が愛劍となつたその剣に。

「……【記憶<sup>リリース・リコレクション</sup>解放術】！」

瞬間膨れ上がる圧倒的な闇。あらゆる光、あらゆるリソースを吸い上げ成長した悪魔の樹。

その記憶は正しく、吸収の力。

友切りの力は命を吸う、死を吸うに過ぎず。リソースであれば全てを吸う 夜空 の前に。

打ち合わせた刹那に解放された夜空の記憶が 友切りから凄まじい勢いでリソースを吸い上げていく。

そう。アスナのマザーズロザリオはけして効いていないわけではない。

彼の肉体は死に体であり、それを戦場に充ちた死を吸収する事で強引に動かしている。

その身体を動かすためのリソースが奪われてしまえば。がくりと身体から抜けていく力。

P o Hの身体に充ちていた偽りの生命力が。

崩れ落ちるP.O.Hの身体を一切の加減と容赦なく。

打ち合わせた剣を強引に振り抜き、後追いするように【夜空】専用に逃えた鞘を振り抜く。

その動きは駒の如く遠心力を活かした鞘による殴打術。直伝抜刀術【旋風独楽】。

血こそは流れぬそれは戦場において許される天命欠損の一打となる。

頭蓋を碎いた感触すら感じて。

事ここに至り、口ニエには一切の無駄はなかつた。

夜空が吸い上げたりソースをそのままに流転し、最大の一手につなげる。

一呼吸。目視。広域にわたる戦場の全ては見えない。

二呼吸。天眼の目付。俯瞰するかのように戦場を把握する。

三呼吸。【夜空】を納刀する。次の一手は抜刀の業の極致。

顔を引き攣らせるアスナ。もし、彼女が真実彼の直弟子であるとい

うのならば。

この局面、敵対するものがどこから来たのかすらわからず、圧倒的なまでに多いという数の理不尽。

それを覆してしまえるヤバめな技を教えられていないわけがない。

四呼吸。四拍が調う。意思は定まる。この世界に来た敵意持つ稀人をもれなく想起する。

五呼吸。不可能な事はない。出来ない事もない。なぜならばこの一斬こそは。

六呼吸。抜刀一閃。

【武装連結連奏：記憶解放術：次元斬・界境崩落】  
ウエポンオーバーライド リリース・リコレクション ディメンジョンスラッシュ・ワールドエンダ

式句は告げられ やつてはいけないレベルの一斬が再現される。されてしまう。

如何なる意志を持つての事か。何故とかどうしてとか理屈とかそういうことをすつ飛ばして。

その一斬は次元の壁、世界の壁を切り裂く。

閻魔刀と呼ばれた刀の持つ原典の力とこの世界において定義され

た力が融合し剣の記憶として宿り。

その記憶を解放するが故に。

世界の壁は崩落する。

納刀する音が響く。

音が消えた世界に静寂が戻る。

数万人規模いた闇の軍勢に加勢していた外界人達は敵意のないもの除去で一切の加減なく強制転移させられた。

残るのは鞘打ちで即死しないまでも死に体となつたP.O.H一人。

『ようやつたの。見事じや。わしが広域術式を使わずとも、アスナがステイシアの力を使わずともすんだな。お手柄じや』

司祭代行リセリスがその声を放つと同時に現われる。

二手に分かれた作戦指揮。中央統括と全域をクイネラが担当し、転移術を持つて各領域の指揮と修正を行うのがリセリスであり、その直下に整合騎士がおかれた。

そしてこの場に用意されていた特級の鬼札が 異界より舞い降り乱心召された最高司祭の目を覚ませたる人界最強の剣士が 見出したその後継。

後に**境界**の**守り**手と呼ばれるロニエ・アラベル。

整合騎士番外となる少女の伝説がここに幕を開けたのである。

# スーパーロニエちゃん 人物設定

## 主人公

### 1：ロニエ・アラベル

どうしてこうなった。キリトの代わりにチートなオリ主が自重しなかつた結果、真綿に泥水が染み込むようにそれを吸収していくしまつた。

が、根っこは優しい少女のままなので 無駄な追い打ちはしないし、無為に苦しめずに一撃で終わらせたい系の剣士になつた。

悪魔の樹 ギガスシダーを元に削りあげられた黒き神器剣【夜空】の扱い手を押し付けられる。が、意外に 貪欲に学んで強くなる成長性と リソース吸収能力が噛み合う事になり、程なくして、その重さにも慣れる。

刀スキルと片手剣スキルを軸にしたユート直伝の我流剣士。

破界流と名付けられたそれは従来通りの【秘奥義】の他に様々な抜刀術を扱う。

神聖術と組み合わせる 紫炎抜刀（炎素を抜き放ちの一斬と共に解放して、斬撃と炎熱効果を同時に対象に与える）など彼女固有の派生がある。

白いコートを譲り受けそれを愛用している。着用するだけで相当なバフ効果がある事を彼女は識らない。

### 2：ソルティリーナ・セルルト

リーナ先輩。無敵のポニテ大剣使い。朱に交われば染まるの第二号。

ユートの指導の結果、強さがえげつない事になつてているロニエと組む事になる女性。

ユートを傍付きに指定したらトンデモだつた。指導するはずが逆に手解きされるとはこれ如何に。

セルルト流の【秘奥義】たるソードスキルを最大昇華し5連斬まで成立させるようになつた。

無論の事、これのみならず、無数の本来ならば各流派の秘奥義と秘せられた両手剣ソードスキルを知らぬままに教え込まれている。【災禍業斬】（カラミティ・ディザスター）と呼ばれる深奥に最近辿り着いた。

セルルト流は無数の武技を操るため、その担い手の彼女は歩く戦術総覧とも言われる。体術も修めており、最近は投げも駆使する。投げ倒して復帰する前に大剣でどかんとぶち抜くえげつなさ　すら彼女の武器である。

### 3：転生司祭様（アドミニストレータ）

甦ったのかそれとも別人なのか。解っているのは良く姿を消すとどうか、こつちの世界に来る事が稀。が、かつての自分のやりようで色々面倒くさい事になつていてる責任を感じているのかどうか定かではないが　禁忌目録の再編纂など、自分がやつた方が面倒が少ない事柄をちまちま進めているらしい

### 4：ティーゼ・シユトリーネン

ティーゼちゃん。ユージオ先輩ラブの人。アリス様が人界特別大使としてリアルワールドに赴かれたその隙を狙つてゐるわるい子。

が。クソ貴族に弄ばれてしまふ定めは変わらなかつた。口二工が口二工ちゃんになつてしまつた結果、其の分二人がかりであれこれされそうになつてしまつた不幸な子。

本来は口二工と組む事になるのだが、彼我の力量差がえげつない事になつたのでバディアクションからは降格してしまつたが、ユージオ先輩のお伴で諸国漫遊する事になつて内心すごい悦んでいる。

### 5：メディナ・オルティナノス

メディナ先輩。ツンデレ風味の刀使い。口二工ちゃんとは刀術談義で花が咲く。

同じ　辻風　なのに　抜刀抜打ち　と　1斬飛び退き真空刃　とか明らかに別技だ。

同じ　浮舟　なのに　全力屈伸切り上げ　と　諸手逆袈裟切り上

げで全然違うとかそう言うの。

どつちも成立してすごい不思議な顔してる。

元老院統括代理 絶対殺すガール。

家系に影差したのアイツが原因と転生司祭様に全部教えられているらしい。

ハアシリアンは最高司祭様のご乱心（ユートのクイネラに入れ替わった）を見て発狂してどこかに消えたらしい。

6：アリス・シンセンシス・サーティ

騎士アリスちゃん。人界特別大使として現実界に行つたり戻つてきたりで忙しい。

セントラル・カセドラルでのユートのウルトラトンチキの餌食になつた人。

曰く『他の誰と戦う事になろうとも、ユートともう一度ガチでやり合うのだけは御免蒙ります（真顔）』

そら。他のゲームから持ち込んできた武装を記憶解放してくる×3とかヒドイ目に遭つたよね（表シナリオなのでエロい目には遭わされていない というか合つても言えない）

7：創世神ステイシア・アスナ

アスナさん。色々あつてこんな所まできて、神様ムーブ決める嵌めになつた人。

これまでの経験を重ねた結果、無制限地形操作の権能は一切の苦も無く扱える。

過去の話に言及されると表だつて話せないので口に濁す。  
言える事と言えない事はきつちり選んでます。

が。ユートのウルトラトンチキの始まりを知つてゐる内の一人ではあるのとアンダーワールドに来るまでのトンチキをもつともよく知る少女ではある。

ミツシヨン1 まじゅうとうばつ なかまをそろえ  
よう!

「セントラルカセドラー・大図書館 兼 カーディナル執務室  
『駄目じや』

にべもなく一言で司祭代行は口ニ工とティーゼの進言を却下した。  
二人よりも背が低い、されど威厳と位格は比較にならない人界においてのトップの一人はその眼鏡越しの睿智溢れる眼で判断した。

「え……でも、ティーゼとは修剣学院でも組んでやつてきました」

だからじやよ。

と前をおいて、司祭代行は問題点を挙げる。

ティーゼ と 今現在の口ニ工では 力量差が装備の関係も相俟つて釣り合わなくなっている事。

結果、生還を目的とした本作戦に従事するには彼我のバランスがわるくなる事。

もし仮に神獣の発生が確認された場合、最悪のケースは討伐任務に移行する可能性があるため、戦線維持と戦線離脱が可能な人材が望ましい事。

『後、肝心な事じやがな。わしはその作戦の終了後、青薔薇の剣士ユージオを供回りにした外遊巡察を予定しておる。あやつめ。自分でやりたがらん事は悉くこつちに回しある……まあ、何が言いたいかといふとユージオと一緒にしばらく旅回りするのとどつちが良いのかといふ事じやが。その為の準備等々もあるから此方に回るならこの作戦には参加させられんぞ』

「え」

「北セントリア修剣学院 女子寮 口ニ工私室」

口ニ工は友情の優しさを思い知る事になつてしまつた。

まあ、それも仕方ない事だと意識を切り替える。

そうなると相方がいなくなり、単独となるため作戦任務には従事できなくなる。

当てが全くないわけではない。

刀使いとして意気投合した先輩筋にあたるメディナ・オルティナノスも居る。

同期の修剣士達から望むのはいささか厳しい。

傍付きの影響を受けて大戦で活躍した事で成績回りや実績評価が著しいため、敬遠されがちなのだ。

自分の勲功評価でもつて実家の貴族爵位をあげる事に振り分けてもらつた結果、4等爵位まで押し上げる事が出来た。

ゴリ押しも甚だしいやり方と 勲功評価大なりとされたのを良い事にティーゼの実家も四等まで引き上げてもらつた。

貴族社会には成り上がりだと色々良くないうようには言われる事だろう。

それゆえに実績を積み重ねていく必要があつた。

「うう……最初っから躊躇いちゃうとは……」

ベッドの上で丸くなりどうしたものかと考える。

傍付き鍊士であつた数ヶ月前ならばそのまま指導生である師に頼めば良かったのだが。ユートもユージオも特例処置で一足飛び以上の間を飛ばして人界軍中枢に据えられてしまつた。

ノック音が響く。

来客の予定は訊いていなかつたが、身を咄嗟に整える。

出入の許可をだすと 1拍おいて。

ガチャヤリと開けられ、そこから現われたのは。

「大戦以来といつたところかな。ロニエ・アラベル修剣士」  
「北セントリア コールディア平原」

「はあ！」

振り下ろす大剣の一撃が真っ向からハジケアリを両断する。

知能も知識もなく人の領域を喰い漁る魔獣は ダークテリトリーに住まう者達よりも近く人間の脅威だつた。

衝撃を与えると体液を弾きさせ爆発するこの魔蟲もまた対処できないものには脅威以外の何ものでも無い。

質のわるい事に養蜂などで生産されるハチミツを主食とするため、人の領域に良く出没する。

更に面倒なのはこのハジケアリが確認されると養蜂に使われるハチも凶暴化し人に危害を加えだすという連鎖反応が起きる。

修剣学院の修剣士はこう言つた害虫駆除などもその責務となる。なるのだが。

「……これは、想定以上に数が多いな。のみならず、脅威度も普段より高い……」

四匹 五匹が群れなして現われるのはいつもの事ではある。だが、恐らくはその算定される脅威度は。

ソルティリーナ・セルルトは冷静に判断しながら敵を屠る。

敵を処理するタスク と 状況分析を行うタスク に思考を振り分ける。

歩く戦術総覧 と評される彼女はその思考を止めない。

考えながら戦う のではなく その二つを切り分けて戦える類い希なる才の持ち主であつた。

五匹を誘い込むように引き寄せる。

脇構えに大剣を備える。緻密に厳密に定められた位置に身体を収める。

セルルト流秘奥義【輪渦】。

両手剣ソードスキル・サイクロンたるそれはかつて 彼女自身の傍付き鍊士だったユートという破格の剣士の手によつて最大五連斬まで行える事を証明された。

その時、ユートが握つていたのが レイトウカジキマグロ と呼ばれる何故かカテゴリーが両手大剣にされてしまうものだつたのはいさか納得していないのだが。

だが、それであるがゆえにそのイメージは峻烈だつた。

正しく身体を運べば セルルト流の秘奥義は一斬のみでは終わらず連続攻撃にすらなるのかと。

彼はその扱いを 源流流派オリジン アインクラッド式 と呼んだ。

そうしてソルティリーナは蒙を啓かれた。

己の主として扱う両手剣の秘奥義はあくまでその一部でしかない

のだと。

秘奥義と秘奥義を連結させる【秘奥義連結】という極峰。

輪渦すらもその入り口であつたなど誰が思おうか。

輪渦が切り裂く5匹のうち、一匹が強化された個体である事を確認する。

彼女の意識はその一匹を確実に斬滅することに切り替わる。

輪渦を振り切った五連斬。秘奥義の後には大きな隙が出来るのがそれまでの彼女の常識だった。

だが、今の彼女にそのイメージはない。

わずかに身体が硬直する刹那に連續する秘奥義のイメージと動く身体のイメージを重ねる。

セルルト流秘奥義よりの連結秘奥義。両手剣ソードスキル・カタラクトと呼ばれるそれは特定の条件下において敵を打上げる。

流れるような秘奥義から秘奥義をつなげるこの連携をスキルコネクトと呼ぶ。

本来であれば。正史であれば黒の剣士ですら5割を切る成功難度のそれを。

ソルティリーナは一切の失敗するイメージを抱く事無く成立させる。

追い打ちをする事はない。本来であればもう一斬加える事すら可能なそれに対して。

横に飛び退く。

その影から走り寄る白い影。

自らの持ち回り分を一足先に片付けたのだろう。

その余裕が此方へ救援となる。

「ハツ！」

オリジン

源流流派 アインクラッド式 刀術スキル 浮舟・古式。

下段から舟を浮き上がらせるほどの一斬。故に浮舟 と称される斬撃で浮き上がり落下する無防備な対象を再度打上げ。

強化されたハジケアリは散滅した。

その斬撃を為した者は。

「……うむ。見事だ。ロニエ。此方の方が一手間遅かつたようだな」  
残心を解きその剣を納刀するとロニエと呼ばれた少女はソルティ  
リーナに向き直る。

白コートに黒い直刀剣。大戦において一躍その名を馳せた少女剣  
士。

奇なる縁はここに結ばれた。

一人の異界より来た稀人を縁にして。

人界軍将軍 【歩く戦術総覧】ソルティリーナ・セルルト  
と

初等修練士でありながらもはや番外として扱われる 【源流の担い  
手】ロニエ・アラベル

はこうして邂逅した。

以後に渡り、長らくの間、轡を並べる事になる二人の最初の任務の  
始まりであった。

ミツシヨン1 まじゅうとうばつ なかまをそろえ  
よう！ 1—2

「北セントリア コールディア平原」

周囲の探索と調査は並行して行われる。

外壁に守られた市街以外にも居住エリアは存在し、また、本来であれば、貴族が守るべき私領民も 領域内に住もうが故に生死も自由であるなどという理屈で守らない貴族の方が多い。

コールディア平原にもそのような村が存在している。

鉱石採掘場や農場など長閑な風景のなかでありながら。それらを睥睨するかのような位置合いに 封印禁足地は存在している。

「……これは……神聖語で刻まれている碑文か」

「……ちょっと読んでみますね…… コールディア平原 ミルディア平原……」

黒い石板に刻まれる文様は赤が既にいくつか灯されている。

「……ミルディア平原は西帝国の領域だな。そうなると……ふむ……いや、もしかするとそう言うことなのかな?……?」

「セルルト将軍。何かお気づきになられたんですか？」

見上げる碑文の色は赤が物々しい。

近くに居る事すら忌避したくなる気配。

魔獣や魔蟲、凶暴化した獸、それらの強化個体よりなおも肌に刺す警戒感。

神獣の封印された地。封じられても尚、その場にある者に警告を発する偉容。

「……ああ、私を呼ぶときはリーナで良いぞ。余り堅苦しくても息がつまるだろう？ それからだ……この石碑が示す地名、そこに存在し、現状確認されている強化個体の数と石碑に灯る赤光円の数……一致しているわけなんだが……偶然と思うか？」

顔を見合わせ、同意の見解を得る。

「実証してみる必要がありますね……確かに、農場の近くに魔獣の発見報告があがっています。そちらを対処してから、引き上げ際にここを確認してみれば検証可能だと思います」

「そんなところか……よし。では、西の農園近くだつたな。行こう」  
→コールデイア平原 西の農園近く 養蜂小屋近くの休憩地  
パチパチと火が燃える。

何時の時代も夜営には欠かせないもの。

炎素を使い火種に火をつけて、暖をとる。

「ほお…… セントリア煮 か。懐かしいな」

口二工がテキパキと用意する夕食を見て懐かしいとソルティリーナは評した。

「いや。何。私の家は爵位が爵位でな。形式張つたものはよく食べるが、そう言う料理は学院時代の夜営でユートやユージオの二人が作るのを食べるのが主だつたものでね」

「なるほど。あの二人は私と出会つたときも夜食を作る担当だつたが、普段からそう言う立ち位置だつたんだな」

「つてだれつ!?」

しゅたつとてをあげる。

赤い跳ねたようなボブショートが特徴的な刀使い。

メディナ・オルティナノスが其処にいた。

「不躾な登場失礼致します。セルルト将軍。つい、悪戯心が働き、隠業と軽業にてどこまで近寄れるか試してみた次第です。お叱りは如何様にも」

ペコリと頭を下げるその姿に毒気を抜かれる。

「いや、良い。それだけ、今宵の夕食に気をとらっていたという事だろう。つまりは我等の未熟だ。気にするな」

「お、驚きました。……ああ、でも、敵意や害意がないのなら気配察知しにくいですし。あ、メディナ先輩も召し上がりますか?」

口二工は予備の食器を即座に引つ張り出し、見せるようにして可否を問う。

煮込まれた鍋に目を落とし、その材料に余裕があるのを見て取ると

メディナは首肯し。

「では、一杯だけ。此方も携行食は持つてきているので其方とあわせるのでそれで充分だ」

黙々とした食事。

貴族としてのマナーは夜営でも生きている。

歓談をするなら食べ終わつた後でも充分だからだ。

無論の事、食事が会話のスペースとなるケースもあるので状況に応じたものはある。

「……では、其方は最高司祭様の勅令で此方に合流したのか」

「ああ、そうなるとこれ、どうも整合騎士案件になりそうですね……」「8割方。どうも、神獣発生には一定の周期があるところまでは見えているらしいのだが、その周期が偶発的なのか、あるいは条件的なものなのかを最終定義するつもりらしい」

ロニエとソルティリーナは顔を見合わせる。

それを見て、メディナは首肯し、手に持つ白湯で唇を湿した後。

「特定の地域に周期的に発生する魔獣や強化個体は、神獣の封印禁足地に設置された石板と関係はあるらしい。だが、これまでダーケテリトリーとの大戦の関係もあって、わざわざ整合騎士を派遣して確定調査をする余裕がなかつたそうだ」

「つまり、大戦が一段落した今だからこそやれる事をやると?」

「人心の荒廃に繋がりかねない案件をこの際、一気に改めなさる御積もりです。魔獣討伐然り、腐敗貴族の一掃然り。司祭代行様直下において行脚を行うのもその一環だそうです」

「……て言う事はこれ……ひよつとするとひよつとしませんか?」「つまり?」

「……神獣封印禁足地の観測観察をこの面子で行えとかそういうお話になつてしません?」

「うん? いや、待て。流石にそこまでは……いや、しかし、確かにこれは報告義務はあつたが終了についての詳細は申し添えられてないな……」

「司祭代行様の巡察について行く場合は、こちらには参加させられな

いという事でティーゼはあちらに行つたので少なくとも北セントリアのコールデイア平原の魔獣討伐だけでは終わらない気がしてきました……」

三人官女は顔をつきあわせて溜息を吐く。

溜息を吐くと幸せが逃げるとは言うが吐きたいときに吐かない溜息は内に淀む。

「しかし、そうなると後もう一人は欲しいな。火力偏重に編制するにせよバランスに整えるにしても、どう整えるにしても三人は歪だ。ロニエがユートの直伝のトンチキっぷりを発揮したとしても1：2だ」

「ええっと……そのトンチキって……？」

「ユート主席上級修剣士に続く北セントリア修剣学院に置ける特例第二号。ロニエ・アラベル特別修剣錬士。それが学院復帰した君の公式の場に置ける呼び名だ」

「ああ、だから教員や師範の先生が腫れ物触るような扱いしてたのか。と今更ながらに遠い目になつてその扱いを実感するロニエ。

「まあ、仕方ないだろうな。ロニエ。お前のそれはほんと、アイツにそつくりだ。ユートの学院に入つたばかりのやらかし以後の扱いとほんと同じだ」

クスクスとメディナが笑う。懐かしいものを思い出すように。

ソルティリーナも釣られて笑う。

この二人には共通して 初年時のユートのやらかし と言う理解がある。

「あの……先輩って初年時に何をやつたんですか？ リーナ先輩の傍付きだった事は訊いてるんですけど……」

ソルティリーナとメディナは顔を見合させ笑う。

快活な笑み。昔話を笑い話を愉しむかのような顔で。

「そうだな。夜は長い。少しばかりそういう話をして共通見解と話題の共通を図つてみるのも良いだろう」

# みつしょんえくすとら ユート初等鍊士のウルトラ トンチキチート列伝 キコリのわざ

「北セントリア市街 北セントリア修剣学院」  
木こりの技が見たい。とそうおっしゃったか。

その声は食堂に重く響いた。

ゆらりと立ち上がる。

このユートという少年は兎角 同年代の上級貴族と折りがわるい。  
一定線の礼儀を払えぬ者には一切の容赦を持たないのである。

メティナ・オルティナノスやソルティリーナ・セルルトのような人  
間のできたものであれば、敬意も表するし、相応に礼も採る。

ただ無意に己が貴族である。と言うだけのガキに一切屈する余地  
などないと言わんばかりに真正面から反意するのである。

故に。彼等はユートという少年にではなく、彼と共に此方にやつて  
きた少年ユージオに貴族特有の特権意識から来る蔑視と悪罵をする  
のである。

不幸だつたのは。

悪魔の樹、ギガスシダーを切り倒す。

その為の天職を授かつていたユージオを手助けし文字通りの 木  
こりの技 となさしめたのが、ユートという少年であるという事実と  
真実。

然るに。木こりの技を見てみたいという天職蔑視の発言は。

この機を持つて彼等に真実を見せる事になるのである。

「……ユート。ステイクール！ 落ち着けつて！ いくら彼等が上級  
貴族だからと言つても 真のアレや僕の青薔薇に耐えられるわけが  
ないだろう！」

「何を言うんだ。ユージオ。彼等が見たいと言われたのだ。それは  
翻つて言えば『自らの天命を削つてでもいいから味わいたい』と天命  
欠損を自ら申し出たに等しいだろう？」

え？ そんなことひとこともいつてない・・・と言う顔つきになる

ライオス。

無論反論しようと試みる。

だがしかし、ユートは理解している。この手合いには一切の発言の余地を認めてはならない。徹頭徹尾、此方の発言で飲み込むのだと。「それにだ。彼等は己が貴族であるがゆえにひとつ気が付いていないんだ。己の立場故に、他者の天職を下に見下げるのが常である彼等には、重大な法理に反する行いがあると」

そこでユートの眼は罪ある者を裁くが如き断罪者の眼を持ち、ウンベールとジーゼックを見る。

「天職とは即ち 世界がそれを与える。貴族を貴族たらしめるように。ユージオ。君の【ギガスシダーの刻み手】とは 世界が定めた公理に他ならない。それを蔑視し下に見下げる事は転じて 公理教会が定めた禁忌目録違反に該当する行いだ。軽微な一例故、目敏く罰せられる事はないし、貴族という立場のみで守られているだけで彼らはすで禁忌目録に違反する行いを幾つも犯している」

良かつたな。お貴族様で。

とその立場故に守られてる身を口にせずに見下す目線をもつて断じる。

「こうした貴族達が修剣学院を優秀な成績で卒業し、騎士として迎えられるとき、その時までに行ってきた軽微な罪の総算を持つてその処遇が決まる。だから、こう言う手合いのお貴族様は騎士にはならず箇をつけたら領地に引き込むのが条理。騎士になろうものならそれまでの微罪の清算が起きるからな」

そこまで言つて場を收めるように乾いた拍手の音が響く。  
咄嗟に立ち上がり、その拍手の主を迎える。

「アズリカ寮監」

ユートとユージオは咄嗟に騎士礼を探る。

「見事です。そこまで、法理に通じてることは思いませんでした。彼等高等貴族にこの学院での下等貴族への横柄な立ち振る舞いを禁じていはないのは総じてそのような理由がある。それをこの段階で知つているとは。よほど良い師に恵まれ、この学院に送り出されたのです

ね」

他の者達は何故、最上級の礼の表し方を寮監にするのかが理解出来ない。

理解出来ないところが彼等の限界であつた。

「はい。この身には加護があります故。この世界を渡るに不足無い知識、智慧を与えてもらいました」

「はい。僕は彼を通じ、その智慧を。知識を。僕らが共に目指す場所に至るために」

ライオスやウンバールには理解が出来ない。

何故、自分たちにはあれほど、横柄に貴族たる身を下に見下げる男があの寮監如きにあれほどの敬意を払うのか。

「……仮にも修剣学院に通い、その寮生ならば、自分たちの生活を管理する寮監がどのような方なのか理解しておいた方が良いぞ?」

「七年前の四帝国統一大会における元ノーランガルス北帝国第一代表剣士。その気になれば、この学院の中でも1か2の剣士。そう言う方が僕らの寮監だ」

未だ、礼を探らない者達を牽制するように伝えると。

彼女はそれを手で軽く横に振り。

「良いのです。私の天職はそれをするにたり得ません。剣を振る事は出来るが、それを指導する立場ではありません。もつとも、寮則を違反したのであれば特別指導も定かではありませんが」

そこまで言うと彼女は居住まいを正し。

「ユート初等鍊土。申請があつた武器について、教官各位との協議が終わりました。神器相当である事。その上で通常保管が可能である事を踏まえ、所持を認める形になりました。また、剣以外の武装においても、所持についてではなく、保管の形においては隨時協議する事になっています。史学や遺物学の教員が目を剥いていましたよ」

それを訊くやいなや。

ユートは腕を振り。

その手に一振りの剛剣を。否。それは冰氣を纏うが故に巨剣に見える。

斧であり剣。斧剣【冰魔 ニーズウォック】。

龍骨斧剣たるそれは重く鋭い。

ノーランガルス北帝国 その最北にある北の洞窟。

そこは寓話に語られる ベルクーリと白竜 の逸話に語られる白竜の棲まう地。

その地にあつた死したる白竜の骨をユートは如何なる神技を持つてか武装に逃えた。

それは神獣とまで言われた白竜より作られた神器となる。

ユートはその名も無き白竜に名を与える。

これにより、その白竜には記憶が与えられる。

命名則による因果転写。【冰龍 イヴエルカーナ】。

それより武装を作り出し、具足と武具を無数に生み出したのである。

見るだけで畏縮してしまいそうになるそれは。

扱い手に対して敵意持つものに 武器の形を持つてして、殺意の代わりに凍てつくような冰氣を感じさせる。

既にして、その武装を完全なる支配下に置いている証左である。

「……ありがとうございます。これで、あの【木こりの技】が見たいと言つたあのお二人に、存分にその技を示す事が出来ましょう……ん？」あの二人はどこに？」

「君がその剣を呼び出した瞬間にさつさと逃げ出したよ…全く、そいつを持ち込むのか君は」  
ち。逃がしたか。

と分かり易い悪罵を吐いて何事もなかつたようにその武器をイベントリに収納する。

「アズリカ先生。時に確認したいのですが」

「なんでしょう」

「もし仮に、整合騎士の秘奥たる記憶解放術にて 神獣や魔獣のような獣を元にした記憶が再現された場合、それが自律行動する条件において、敵対象の天命が削がれた場合、それはどこに責任が行きますかね？」

「…あなたは…いえ。深くは追及はしません。その問い合わせへの回答は、  
『不遇なる事故』になるケースもあり得ますとだけ」

みつしょんえくすとら ュート初等鍊士のウルトラ  
トンチキチート列伝 えんはんすあーまめんと・たい  
じゅつのすぺしゃりすと

式句を唱える。

「エンハンス・アーマメント…ッ 吠えろ！ イヴエルカーナ！」

本来属する正しき世界において。

スラッシュアックス：属性解放突きと呼ばれるそれは。

その鋒から吠え猛る冰龍の咆哮の如くに 冰氣を炸裂させた。

突き刺した鉄塊は その本来の姿を忘れるかのように氷塊に如く  
に凍りそして破碎された。

「…これが、先ずは第一段階。 冰氣咆哮 とでも名付けておくかな」  
特別に用意させた鉄塊をただの一太刀、ただの一回でなんのようも  
為さない鉄ぐずに為してのける。

アレがもし同等の人体に向けて打ち抜かれたのであれば、確実に天  
命を全損させうるだろう。

そもそも、彼の扱う武装のほとんどは人外を相手にする前提だ。

対人用の装備もあるし、スキルもある。

その証左に。

武装を解除し、何も持たぬ素手。

ユートはこの世界がこれまでの世界より、より人体の再現に優れて  
いる事を実感したのは 体術、格闘技に分類されるものに違和感がない  
事を感じたときだった。

投劍、体術 と言ったものは 本道ではないが故に、流派立てられ  
たものにならず、各流派に手管として残るのみではあった。

重撃、不意打ち と呼ばれる技法がアンダーワールドにはある。

それは相手を失神させる技法であつたり、歩法を使い相手の背後に  
廻り込み、相手の後頭部を打撃しスタンさせるなど正道からは嫌われ  
るような動きであつたりはする。

ユートはそこより発展させて、体術スキルを定義させる。

源流流派 アインクラッド式体術であり 現実世界より持ち込んだ格闘武術である。

厳密に定められた型に身体を収めたとき 【秘奥義】は発動する。扱い手無くして使うものがなかつた【閃打】と呼ばれる基礎の体術ソードスキル。

ユートはユージオにこれを先ずは使えるようになるよう仕込んだ。

ソードスキルの隙に打ち込み片手で行える牽制の技。  
続いては【前方宙返り回転蹴】・ペイルライダーと。

大道芸の如くと揶揄されるのであればそれをとことんまで極める。その上で、揶揄したものを地に這いつくばらせる。

片手剣においてはユージオは紛れもなく天才であった。

それは、殊の外ユートには喜ばしかつた。

剣腕を自らで磨くセンスがあるのであれば、切れる手札を増やせば良いのだから。

そう。明確に天命を欠損させずとも、対象を制圧する術を身につける。

修練の元、特別指導と監視をアズリカ寮監に依頼しその許諾の上、天命を削ぐか削がないかのギリギリのバランスでの組打ち。

それに伴う痛みに対する痛撃耐性訓練。

これから挑む先を思えばこそ、痛みで次の一手が打てなくなる。などという事は許されない。

ユートはユージオの目指す先を見据えていた。

「北セントリア セントリア修剣学院 早朝の広場」  
少年が特徴的な構えと共に。

手の型は拳を握るのではなく掌の型。

左手を手首で軽く曲げ、肘もまた曲げて目前備え。

右手は丹田に備えるように掌の型。

屈伸運動に備え、両膝は軽く曲げられている。

刹那。

早朝の広間に 韶く音。

瞬時に動いた少年の動作が一連の流れの中に 震脚 と呼ばれる固有の動作を織り交ぜたのだ。

飛び上がる虎が猛襲するが如き動き。

前方に飛び込むように脚を動かすと同時に、伸ばし振り下ろす左の手。虎の左前脚の爪による攻撃を模す。

振り下ろす左の掌と踏み込む脚。その動きが同時に至る。足が地に着くと同時に右足を前に蹴り出す。前方に引きのばさるかのように急激な運動。

右の手もまた同じく振り上げ振り下ろすように。

右足の接地。それと同時に左の手を突き出すように打ち込む。一連の流れを素早く、正確に辿る。

反復を重ねる。

八極拳は猛虎硬爬山の動きを象り真似る。

肘撃からの鉄山靠。

流れを組み、一連の動作として連環する。

その最中に特色あるものとして、震脚が織り込まれる。

地を鳴らすその踏み込みはもはや早朝の寮の前では風物詩となつていた。

誰もそれを止める事は叶わない。なぜならば、その動きの一つ一つに【秘奥義】の発動と同じくして、纏うものがあるのだから。

体術の【秘奥義】として成立しているそれは、既にして五体が剣と同等の破壊力を持つに等しい。

繰り出す肘 も 背中からの体当たりも肩口からの体当たりも。掌底も。何もかもがイメージの補強を受けて絶紹の域に上つていた。

開門式から歩法、猛虎硬爬山、肘撃、鉄山靠。往復するように。

動きを切り替える。

身体の伸縮動作を大きく伸び伸びと行うように。

劈掛拳ひかけんと呼ばれる動きの要諦は柔の動作。

振り下ろしと振り上げを掌打の形で行い、大きく動きをとる。

その動きは直線的ではなく曲線的。

いつそコミカルにさえ見えるが、上下の運動は激しい。

全身の力を抜き腰を支点にして上体は上下左右に揺れる。

その揺れさえも振り回し振り下ろす掌打の威力に繋がる。激しく飛び上がり、激しく着地する。

その反動で振り上げる掌打の威力を高める。

八極拳と劈掛拳。

その双方をイメージを補強する事でアンダーワールドに引き下ろしたのである。

相手の背後や側面を採るように動く劈掛拳。

直線的に動き絶大な破壊力を持つ八極拳。

それらを絶大な威力に引き上げる発勁。

轆轤の如くの反発を勁力に取り入れしなやかでありながら素早く。この修練を見たアズリカは後にこう評した。

『徹底した対人戦闘技巧。人型犬の存在ならば、彼は武器無くしても征する事が出来る。あの動きに神聖術による補正を加えたのならば、その五体全てが武器と言えましょう』と。

そしてそれは事実であった。

初年次において彼は最初の入学試験において木刀一本。学院の正式剣術とは懸け離れた技で優秀な成績を収めた。

相手の攻撃に合わせて先を探る 後の先による制圧。

ハイ・ノルキア流の天山烈波 を未熟な使い手なれば。と言つてその鼻先に剣を突きつけて征する。

ノルキア流の雷閃斬 を 真横一文字に発動前に打ち据える。

などといった対人において、これまでにない素早さで圧倒。

それだけならいざ知らず、その木刀の構えを片手剣の型に備えてもまた。

始まりの合図共に即時発動し相手の剣を叩き落とす「ソニツクリー  
プ」。秘奥義を持つて初手を征する立ち回り。

打ち込んできた相手を剣で弾き、生じた隙に袈裟で切り落とす【ス  
ラント】。

自在に剣を繰り、明らかな格の差を見せつけたのである。

だが、それに留まらず 120名の中で総合の1位を 姓 持たざるものが持ち去るという学院始まって以来の快挙であり、貴族出身者達からは看過せざる暴挙を成し遂げたのである。

二年の傍付き鍊士を選ぶ権利を持つ上級修剣士達は、苦慮と己の立場から、最上位のものを敬遠するという事態となり、最終的にソルティリーナ・セルルトが初等鍊士最強を示したユートを指定する事になつた。

武技、剣技ともに優れ、姓持たざるものとは思えないほど、深く深奥に至る知識の数々。

これほどの存在であればと過去を調べてもその正体に当たらず。彼は嘯いてこういつた。

僕は三女神の寵愛と三聖人の庇護を受けていますから。  
と。